

△だってあるじゃない

講演	鈴木 直人〔すずき・なおと〕
講師紹介	同志社大学心理学部教授
研究テーマ	感情心理学、環境心理学、精神生理学

皆さんこんにちは。心理学部の鈴木です。本日は、同志社スピリット・ウィークで話をさせていただく機会を与えていただき大変光栄に思います。

我々が見たり、とらえたりしているモノは、その一面に過ぎない

私は、来年の3月で定年を迎えます。本日、こうしてお話をする機会を与えられましたので、最近の日本の風潮、それは同志社についても通じるものがあるのではないかと思い、「△だってあるじゃない」というテーマにいたしました。

ここに、黒板消しがあるといたします。皆さんの方から見ると、消す方が見えますが、私が手に持っている後ろの面は見えません。逆に、私の方からは消す方の面は見えません。右や、左から見ればまた違う見え方があります。しかしながら、この黒板消しは一つです。ある一つのモノを我々が見る時、言い換えると、把握しようとする時、見る方向の違いでそのモノの見え方には無数の見え方があります。人間は、この黒板消しみたいに簡単な形をしておらず、もっと贅があり、凹凸があるため、1人の人が、いろいろな、無数の面を見せることになります。でも、その人は1人なのです。

いろいろな面をもっている人間やモノ事を、人はなぜ一面的に捉え、時にはこういう人というレッテルを貼ってしまうのでしょうか。状況によってモノの見え方、とらえ方が違ってしまう例をもう少しお話しします。

1と3という文字を、くつつくくらいに並べて書きます。その文字の左に12、右に14と書いて見せますと、その文字は13という数字に読まれますが、左右にAとCを配置すると、同じ文字がアルファベットのBになってしまいます。また、アインシュタインの写真を縮小していくと、いつの間にかマリリン・モンローになってしまいます。マリリン・モンローって、今の学生の皆さんではご存知ないかもしれません。昔、一世を風靡したアメリカの女優さんです。

何が言いたいかと言いますと、モノにはいろいろな見え方、とらえ方があり、見る方向や、周りの状況などでその見え方、とらえ方は変化してしまいます。決して一つの見方だけが正しいものではないということです。すなわち、我々がこうだと感じているのは、モノでもそうですが、特に人間の場合には、その人の一面に過ぎないことが多いということです。

心理学的興味

ではなぜ一面的な物事のとらえ方をしてしまうかと言うと、我々人間には「心理学的興味」というものがあるからです。相手のことを早く知りたい。早く相手のことが分かれば、人間関係をうまくやっていくことができるのではないかと考えてしまう、こういった人間のもつ性（さが）があるためではないかと思います。皆、自分のことを考えれば、人間がそんなに単純な存在ではないということは分かりますが、自分に直接かわからないことであれば、どうでもよく、とらえやすい方法でとらえてしまい、それが正しいと思い込んでしまうのです。血液型と性格の話や占いを信じる気持ちも、早く相手のことが知りたいというこの心理学的興味の所為です。

エコー・チェンバー現象

話は変わりますが、先日の総選挙で、皆さんご存知のように、小池新党、希望の党の小池都知事が「民進党議員を全員受け入れる気はない、『排除』する」という極めて不用意な、きつい言葉を使い、野党を混乱の渦に巻き込み、自民党大勝のきっかけを作ってしまいました。勿論、選挙のことですから、この小池さんの言葉が選挙結果にどう影響を与えたのか、政治アナリストでもない私には分かりません。私は、この排除という言葉に、最近の同志社も含めた日本、さらには世界の風潮が反映されているように思えてならないのです。

エコー・チェンバーという言葉をご存知でしょうか。エコーは「こだま」などのエコーです。チェンバーは部屋というような意味ですので、全体の意味としては、「言葉がこだまする部屋」というような意味になるのでしょうか。ウィキペディアの文章を引用しますと、「エコー・チェンバーは、情報やアイデアや信念などが、閉じたシステムの内部でコミュニケーションされ、反復されることで、増幅、強化される状況のメタファー（隠喩）となっている。比喩的な意味におけるエコー・チェンバーの内部では、公式発表には疑問が一切投げかけられず、それと異なる、あるいは、対抗する見解は、検閲、禁止されるか、そこまでならないとしても目立たない形でしか提示されない」と書かれています（2017年11月2日現在）。私たち人間には、自分と異なる意見をもつ人、価値観をもつ人、自分とは異なるモノの見方をする人と接するのはしんどいし、疲れるため、その人を排除し、自分と同じような意見、価値観、モノの見方をもつ人と群れようとする性があります。SNSの出現は、相手の姿が見えないために、これを助長し、こうしたグルーブを作りやすくしているとも言われているようです。また、私は、SNSの普及が、相手の反応をデジタル的に判断させるような風潮を助長しているようにも思います。

自分たちの考えは正しい。こうした同じ意見をもつ者ばかりが集まって、同じ意見ばかり聞いているので、それに疑問を差し挟むことがすたなくなり、それ以外の考え方やとらえ方は間違っていると思い込んで排除してしまうのです。

自分たちにとって不利な情報はフェイク・ニュースだと一蹴してしまい、歯牙にもかけず、そうしたものは排除すべきだというのが、アメリカ大統領選挙のトランプ陣営で見られた現象であったことは皆さんよくご存知だと思います。なにか、昔の大政翼賛会みたいなものを感じるのは私だけでしょうか。小池さんの排除という言葉の根底には、そして都民ファーストの会のメンバーに意見を出させない、民進党出身議員に誓約書の提出を求め、従わない前議員には公認を出さないといった行動を当然のごとく行ったのも、まさに彼女がこのエコー・チェンバーの中にいたためではないかと思います。いずれにしろエコー・チェンバーの中にいると同じ事しか聞こえてこず、違う意見があるということは無視されてしまいます。違う意見を認めない、言わない、〇か×の世界、ここに差別が生じ、二極化や分断社会が生じ、その結果いじめなどの諸問題が生まれてきます。

子ども社会と同じ、今の社会情勢

現代社会は子ども社会のいじめの現象と相通じるものがあるように思えてなりません。子どもの社会は徒党集団が基礎になっています。徒党集団というのは、本来、上級生のボスがあり、その下に子分の下級生がいるというヒエラルキーをもつ集団です。この集団の特徴は、同性の集団で形成され、他者や他集団を排斥するというものです。ただし、お断りしておきますが、この集団は、子どもたちが自立するためにさまざまなことを学ぶ場です。つまり子どもの発達にとっては非常に重要な集団です。ところがこの集団が、近年、同級生の集団に変化しました。藤子・F・不二雄氏の『ドラえもん』で描かれている世界です。最近さらに、この徒党集団が変化したと言われてます。それは、同じ趣味、同じ能力など、共通したものをもつ者たちだけで構成される集団です。もう一度言いますが、徒党集団は、自分たちの仲間以外の個人、集団を排斥することを特徴とする集団です。

自分と違う人間には負のラベル付けをする。その結果、いじめの対象は昔のように運動が苦手な子、勉強ができない子などといった、自分より劣ると思う特定の子に対してだけ行われるのではなく、勉強ができる子、運動が得意な子、学級委員長、誰であっても関係ありません。自分たちと違う考えの人間、違うことをする人間、自分たちに同調しない人間は、すべて悪いものだとして排除してしまいます。この子ども社会の徒党集団の特徴を、今の世の中と同じように感じてしまうのは私だけでしょうか。

子ども社会だけでなく、最近では大人の社会でも、いじめが横行し、むしろ拡大を続けているのも、こうした社会の変質のためかもしれません。実を言いますと最近、子ども社会はさらに変質し「席を同じうすれど、交わらない」になりつつあるように思います。そうすると将来いじめはなくなるのではないかと思います。怖い社会になってしまうと思います。この話は本論から外れますので止めておきます。

自分の見ている世界はその一面に過ぎない

これは以前、小学校の校長を兼務していた時、聞いた話ですが、特に問題になるようなことがなく、いわゆる「うまく」いていた小学校での話です。

その小学校には職員室の横に、白いテーブルが置かれた空間がありました。

その空間は、先生たちが、時間が空いたときなどに集まって、お茶を飲みながらいろいろな話をするにに使われていました。

ある年、校長が異動で交替し、新しい校長が赴任しました。その校長には、その空間が無駄な空間だと感じられたようです。その空間をもっと有意義に使うということで、白いテーブルは取り除かれ、その空間は別の目的で利用されることになりました。するとやがて、学校内がザワザワしました。大きな問題、小さな問題、いろいろなトラブルが起こりだしたのです。皆さんには、なぜこういう状態になったかお分かりでしょうか。校長が無駄だと思った空間が、実はいろいろな学内の問題の調整機能を果たしていたのです。たとえば、ある担任が、そこで茶飲み話の中で「うちのクラスのA君は、本当に困った子で、他の子に乱暴ばかりするんですよ」と他の先生にこぼしました。すると、他の先生も「そうそう、A君はね」と相槌を打ちました。しかし、それを聞いていたB先生が、「だけどA君、この間、小さな子が泣いているのを、一生懸命慰めていたのを見たわよ。A君には優しい面もあるのじゃない」というような話をされました。それを聞いたその担任の先生は、A君に違う面があることを知り、そのような目で見てみると、乱暴な子だとばかり思っていたのが、A君にも優しい面があることに気がつきます。そうすると、A君の違う面、素晴らしい、優しい面など、いろいろな面が見えてくるようになってきたというわけです。先生のA君に対する見方が、変わってくるだけではありません。A君に対する先生の態度の変化は、やがてA君自身の行動も変えていきます。こうした茶飲み話みないな、情報交換のおかげで、ポジティブなスパイラルが回りだし、その小学校では、トラ

ブルがほとんどなかったのです。そういった場所をなくしてしまったことが、この学校がザワザフしだした原因だったと思われます。もし、A君のおかれた環境が新しい校長の下のような状態が続いていたらどうなったでしょうか。おそらく、担任の先生は、A君を乱暴な困った生徒とみなし続けたでしょう。そして、A君は優しい面を出すことなく、卒業していったかもしれません。この事例は、いかに私たちが一つの考えに凝り固まってしまうこと、レッテル貼りをしてしまうことがさまざまな問題を起こすかを物語っていると思います。

○×の世界

SNSが一般的になりだした頃、こういう経験をしました。中休みの時間、教室である学生と話していた時、その学生が友達にメールをいたしました。相手はなんと同じ教室の5mほど離れたところにいる友達でした。私は思わず、彼女に聞きました。「なんで直接行って話さないの」。彼女は答えました「だって、メールの方がイエスカノーかははっきりするじゃないですか」。この答えに私は非常に驚きました。イエスカノーか、相手の意志を確かめる時、相手がイエスと言っている、顔色や態度などいわゆる非言語的行動を見ていれば、この人はイエスと言っているけど、本当は嫌なんだというように、心底イエスなのか、そうでないのか、どの程度イエスなのかといったことが分かります。コミュニケーションで重要なこと、人間関係で重要なことは、この曖昧さの理解だと思うのですがいかがでしょうか。ある意見に対して、全面的に賛成、あるいは反対というより、この面は賛成だがここは反対というように、どちらかと言えば賛成、どちらかと言えば反対というような濃淡、曖昧さを、多くの事柄に対して我々はもっているのではないのでしょうか。ところが、SNSを使ったコミュニケーションでは、そのあたりの曖昧さが消されてしまいます。イエスあるいはノーという答えだけが残ります。皆さん、それで皆さんの気持ちは満足できるのでしょうか。

もう一つ、以前、私はキャンパス・ハラスメント防止委員会の委員長をしていたことがあります。その関係で裁判所に、ある事件の証人として出廷したことがありました。そこでのやり取りは、今考えても虫唾が走るほど嫌な経験でした。弁護士の方から、「〇〇さんの件について、これはどう思うかイエスカノーかで答えてください」と質問されました。その件についてはいろいろと事情がありましたので、「これこれこういうわけで・・・」と答え始めると、「そんなことは聞いていない、質問にイエスカノーかで答えろ」と詰め寄られるのです。途中経過は省いて最終結論だけを求める強引さに唾棄したいとさえ思いました。裁判という曖昧さが残ることが許されない状況だからこそ、こういう詰め寄り方をされたのだらうとは思います。しかし、イエスカノーかという結論が出れば、途中どうであったかということとは関係ないということではないのでしょうか。私には納得がいきません。

日本人の気質

私は心理学を専攻しています。心理学を研究していると、人間は非常に多様な、そして曖昧な存在だと思わされます。つまり人間の行動は1+1が2にならないことがある、杓子定規には行動しない、白だ、黒だという二分法では説明できないということを何度も何度も経験しています。と言っても入学試験などのように白黒をつけなければならない場合があることも重々承知しています。だからと言って、何事も、すべて白か黒かの二分法で考える必要はあるのでしょうか。

わが国には古来より情状酌量という習わしがありました。塩梅（あんばい）という言葉もあります。今の若い人の中には、情状酌量をすることは不正である、状況によって塩梅することは悪だと思っている人もいるのではないかと思います。また「いい加減」なことには、悪いイメージをもたれている方が多いのではないのでしょうか。私は、日本人は昔から情状酌量、塩梅、いい加減といった配慮を行い、曖昧さを大事にしてきた民族であり、それは日本の誇るべき文化であると考え思っています。曖昧なことは悪なのではないでしょうか。いい加減は、「いい」加減なのです。

以前、長刀鉾に稚児の祖父役として乗る機会を2度もあたえられました。その長刀鉾の心柱、上に長刀を飾る柱は、鉾の中に穴がありそこに刺し込み、縄で縛って立てられるのですが、その心柱の大きさと穴の大きさは数センチの遊びがあります。昔、ある鉾で、この心柱をきつく縄で絞めて建てたところ、動かした途端にボキッと折れてしまったことがあったそうです。つまり、祇園祭の鉾の柱は遊びをもたせてあるから折れずに立っていることができるのです。この縛り方こそ、いい塩梅であり、「いい」加減なのです。

和辻哲郎さんの『風土 人間学的考察』という本には、世界の民族は、その住む環境、風土によって気質、性格が形作られ、日本人はモンスーン型気質をもつと分類されています。つまり日本人は、幾多の自然災害、台風や地震、集中豪雨などに見舞われるため、おのずから、強いものには巻かれ、強いて抗わないという気質になってきたのだというわけです。その結果、自然の力は偉大だ、それに抗っても仕方ない。服従しなければならない。ではせめても、人間同士の問題には多少のことは目をつぶって、大きな災害時には助け合おうじゃないか。そのためには相手の事情も酌んでいく必要があるし、白黒をつけず曖昧な状態の方がかえって人間関係はうまくいく、灰色でもいいじゃないかという態度をもつようになってきたのではないかと思います。つまり、日本人は、おかれた環境から1+1は2でなくてもいい、その方がうまくいくということを知っていたのだと思います。だからこそ日本人は、曖昧な事柄を良しとし、大岡裁きや遠山の金さんの話に拍手喝さいをしてきたのではないのでしょうか。

二者択一的な考え方は想像力の不足

ではなぜ〇か×かという考え方をしてしまうようになってきたのでしょうか。先ほど述べた、心理学的興味というものも大きく関係してくるでしょう。しかし、それは偏に、日本人が考えることを放棄しつつあるため、あるいは、想像力が足りなくなってきたことの証ではないかと思います。想像力の対極にあるのが排除だというようなことをある作家が述べているという話があるラジオ放送で聞きました。運転中だったため、メモが取れませんでしたので、どこに書かれている言葉かは定かではありませんし、言葉も正確なものではないかもしれませんが、まさに今の世の中を言い表した言葉のように思います。

曖昧なことを言うより、〇です、×ですという方が分かりやすいため、人をひきつけます。特に自分自身に関係することではなく、人のことであれば、余計、白黒をつけてしまう方がすっきりします。もしそれが、自分自身だったらどうなのでしょう。卑近な例を出しますと、ある科目の試験で合格点に1点足りなかったとします。その人はもう4回生です。この科目を落とすと卒業できません。その人はその科目とは無関係なところに就職することが決まっています。貴方が教員だったら、どうされますか。点数が足らないのだからと言って、規定通り不合格としますか。勿論その選択は間違っていない。こういう事態に陥ったのは誰の所為でもなく本人の所為です。しかし私はこのような場合、合格にするか迷います。では、足りないのが1点でなく2点ならどうなのでしょう。3点なら、4点なら、私は毎年のようにこうした問題で悩みます。そして考えます。この学生を通すだけの、情状酌量の理由はないだろうか。出席は毎回していたのだろうか、課題は出していたのだろうか、その課題の出来で考慮すべき点はないだろうかなどなど。合格させてもよいと自分が納得できる理由を探します。そして、通すのか、やはり落とすのか、最終判断をします。合格点未満は考慮しないと決めてしまえば、こんなことを悩んだり、考えたりする必要はありません。でも、人ひとりの人生に影響を与える事柄なのです。規定や規則は、人間が作ったものなのです。

最近、同志社でもさまざまな問題が起こると、すぐに規則を作るということが提案されるようになったと思います。こういう場合はこういうようにしましようというのが規則や規定ですが、すべてが同じ状況で起こっているのでしょうか。千差万別で、100の事件があれば100の状況があり、全く同じ状況というのは存在しないと思います。ある事件が起こり、それにどのように対処したかは、記録として残しておくことは大切です。しかし、同じような問題が起こった時に、その例を引き合いに出しながら、もう一度考えるべきではないのでしょうか。規則にあるからとの理由で決着をつけるのは、私はいいことではないと思います。新島は同志社創立10周年の記念式典で、新島が不在中に退学処分を受けた学生を回顧し、退学処分にしてしまったことは今更どうしようもないが、人ひとりは大切ですと涙と共に語ったといします。皆さんも含め、私たちの決定が、往々にして人の運命を左右することがあると思います。その行為が、相手にどのような影響を与えるかを想像することができる人間になりたいものです。

最後に

同志社大学は、〇や×ではなく、△という違う存在を認めてきた学校だと思います。だからこそ、新島と対立して退学をした徳富蘇峰がその後、新島に心酔し、死に水まで取ったのだと思います。最後に新島の遺言の5番目を引用します。

「同志社は陸なる二従ひ機械的二流の恐れあり切に之を戒慎す可き事」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』4 同朋舎出版 1989年 403頁）。

新島は、今の世の中を、そして同志社大学の姿を看破していたのではないかと思います。世の中は白黒だけではなく、白だ、黒だと言っても濃淡をもっている。〇や×の二者択一ではなく、△という自分と異なる意見をもつ人も存在することを認めることができる人物になっていただきたいと思います。二者択一ではなく、想像してみてください。考えてみてください。そこから、新しい世界が見えてくるのではないのでしょうか。